日本生協連ＨＰ「復興支援ポータルサイト」連動企画（奇数号掲載）

フォトルポ　被災地は今

コープふくしま　渡邊洋子理事×山田省蔵カメラマン

※日本生協連ＨＰ「復興支援ポータルサイト」にご寄稿いただいた組合員理事と一緒に現地を歩き、「被災地」の今を写真でお伝えします。（取材日時：1 月 16・17 日、場所：福島県新地町、相馬市、南相馬市）

今年 1 月 15 日に営業を再開したばかりである相馬市のイチゴ園にて。イチゴは、ビニールハウスの園内で、あたたかな日差しのもと、すくすくと成長中。

震災から 10 カ月たった、現在の相馬市

新地町役場展望室からは、色のない大地が見える。「津波で建物が流され、何もなくなってしまいました」（渡邊理事）。発災直後、役場には、全国の生協からの支援物資が多く届いた。

相馬港。出番の来ない船たちが並ぶ。「相馬といえば、海だったのですが、今は、海は見たくないです。湾の形がまったく変わってしまいました」（渡邊理事）

生協、人、絆

取材日、渡邊理事が南相馬市の組合員委員４人を集めてくれた。「4人こうして集まることができていいですね」と言うと、「あと渡邊さんもね！」との答え。困ったときに支えてくれる渡邊理事を、皆が信頼している。

「震災後、生協が青空市やるってテレビのテロップ見たときは、もううれしくて！」と委員の柴田さん。

この青空市で、渡邊理事は、委員たちと再会した。

渡邊理事、そして委員の４人が、「全国に伝えてほしい」と持ってきてくれた資料。「東京は、報道が少なくなっているでしょ」

福岡からの自衛隊が立てたメッセージ入りの日の丸。
今はもうボロボロだが、多くの人の心のよりどころとなっている。

理解しようとしてください

「福島の現状に目を向け、理解しようとしてください。まだ、原発事故のことについて、頭の整理がついていません。東京の電気をつくっていたのに、東京では、がれきの受け入れも進んでいません。宅配の職員も今は少なくなってしまいました。早く元の福島に、戻りたいです」（渡邊理事）

正しく理解し、正しく怖がるために、生協では、「放射能の学習会」など、福島に住み続けるための企画を随時行なっています、と渡邊理事。

生協として何ができるか、理事として、どう地域に貢献できるのか。震災からの復興、放射能という問題に向き合う理事の苦悩は計り知れない。そんな中、模索しながら、できることを一つひとつ実行している理事の姿が印象的だった。

（左上）：ここから先は、警戒区域。人影がまばら。「前はもっと少なかったんですよ」（渡邊理事）
（左下）：相馬港の造船所。復興に向け、一歩一歩進んでいる。
（右）　：奥に見えるのは火力発電所。津波の被害を受けたが、電力不足に対応するため工事を急ぎ、12 月末になんとか復旧した。

コープふくしま理事　渡邊　洋子さん

渡邊理事の寄稿文は、日本生協連ＨＰ「復興支援ポータルサイト」にて、ご覧いただけます（http://shinsai.jccu.coop/contents/0011/）。